

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第7号（10月）について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

水稲収穫後の耕起を行ってヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう！

ヒメトビウンカ越冬虫における縞葉枯病ウイルスの保毒虫率は、年々高くなっており、縞葉枯病の発生も年々増えています。

水稲収穫後は速やかに、本田・休耕田の耕起と畦畔等の雑草防除を行い、越冬幼虫の密度を下げましょう。

本年は、高温で経過しているため、早期・早植水稲の「ひこばえ」の生長が旺盛です。早急に耕起しましょう。



ヒメトビウンカの中齢幼虫

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	少	少	少
	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
かんきつ	ミカンハダニ	並	並	並
かき	炭疽病	やや少	やや少	並
果樹共通	カメムシ類	並	並	並
イチゴ	炭疽病	やや少	並	やや多
	ハダニ類	少	並	並
野菜共通	ハスモンヨトウ	多	多	多
	オオタバコガ	やや多	やや多	やや多

注：果樹共通カメムシの平年比は、後期発生年の前7か年平均比

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は高いでしょう。降水量は平年並で、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目～2週目は高く、3～4週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率（福岡管区气象台 平成22年9月24日発表抜粋）

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

農薬の適正・安全使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を、関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録がとれている作物がメーカーによって異なる（例：スミチオン水和剤40）ので、ラベルをよく確認する。

2 飛散防止対策の徹底

○風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時にはラベルの注意・警告マークを良く確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されている。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について
ホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物—大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

ミナミアオカメムシ

25株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 1.2頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率 6.3%（平年 17.9%、前年 11.1%）

3種吸実性カメムシ類（アカカメムシ、イフェンカメムシ、ホバカメムシ）

25株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 1.8頭、前年 0.9頭）

発生ほ場率 6.3%（平年 36.7%、前年 22.2%）

イ 県下3か所の予察灯における9月1～5半旬のミナミアオカメムシの合計誘殺虫数は、13頭（過去6か年平均 88頭、前年 33頭）で、過去6か年平均及び前年より少なかった（-）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 吸実性カメムシ類の加害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除を行う。

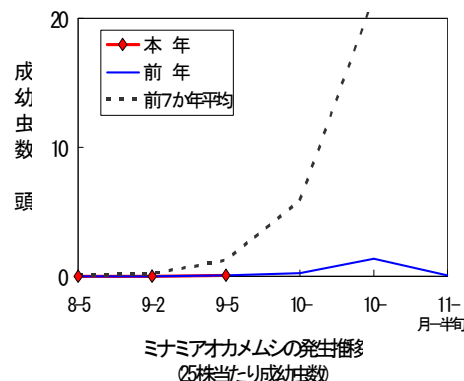
イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。

なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ 水稻収穫後、ミナミアオカメムシが飛来する場合がありますので、大豆ほ場での発生状況に十分注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフエン剤の防除効果が低いので、効果の高いジノテフラン剤又はクロチアニジン剤を使用する。

オ 防除に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散（ドリフト）防止の徹底を図る。



2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

25株当たり幼虫数 20.8頭（平年 44.4頭、前年 29.0頭）

幼虫発生ほ場率 81.3%（平年 82.1%、前年 94.4%）

イ フェロモントラップにおける9月1～5半旬の誘殺虫数は、平年よりやや多かった（+）。

筑紫野市 2,175頭（平年 2,490頭、前年 447頭）

柳川市 5,409頭（前年 2,425頭）

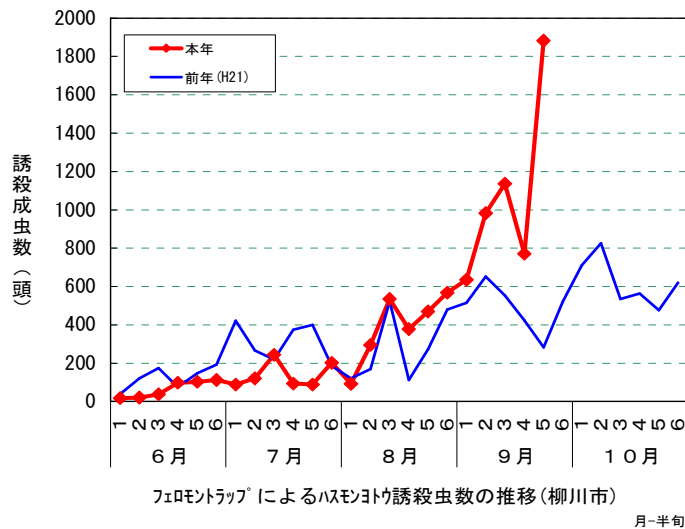
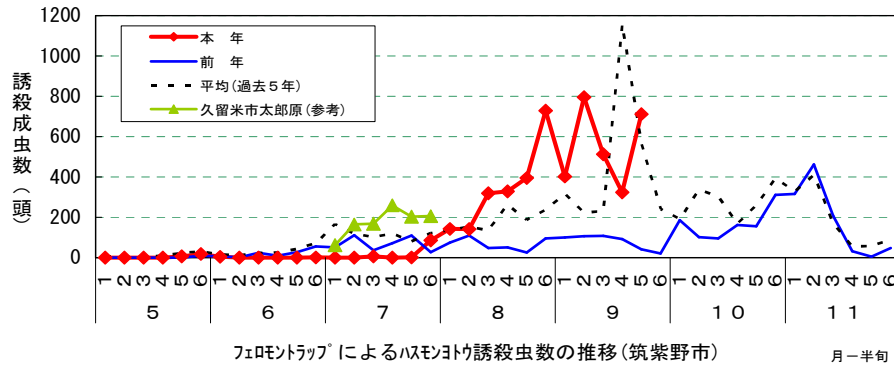
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 地域によって発生に差があるため、必ずほ場での発生状況を確認し、ふ化幼虫が群生した白変葉が発生して加害が続いている場合は早急に防除を行う。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

- ウ 薬剤散布は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。中老齢幼虫が混発している場合は、これらの幼虫にも効果の高い薬剤で防除を行う。
- オ 防除に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散（ドリフト）防止の徹底を図る。



【果樹】

1 かんきつのみかんハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(－)。

寄生葉率 8.5% (平年 5.1%、前年 6.1%)

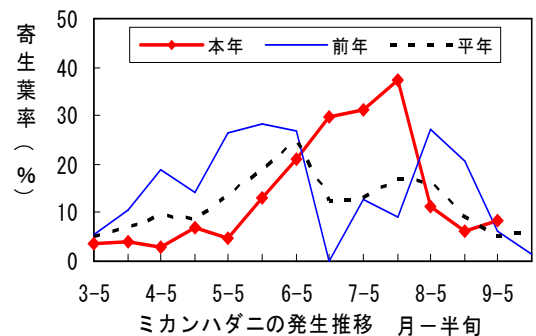
発生ほ場率 50.0% (平年 40.0%、前年 41.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

発病果率 0.3%（平年 1.0%、前年 0.2%）

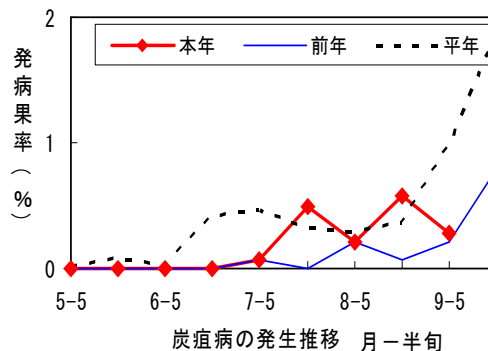
発生ほ場率 14.3%（平年 42.1%、前年 21.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である罹病枝及び罹病果は除去・処分する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園では、薬剤防除を徹底する。



3 果樹共通のカメムシ類 (チャバネカメムシ・ツバカメムシ・クダカメムシ)

(1) 予報の内容

発生量：後期発生年の7か年平均・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下6か所の予察灯における9月1～4半旬の主要3種カメムシの平均誘殺数は2,113頭（7か年平均2,106頭、前年621頭）と、後期発生年7か年の平均並で、前年より多かった（±）。

イ 9月5半旬のヒノキ球果口針鞘数調査の結果、本所管内は平均27.8本とヒノキからの離脱目安とされる25本を超えている。

* 筑後支所管内は8月5半旬の調査時点で25本を超えているが、行橋支所管内は5.1本と未だ25本に達していない。

また、9月5半旬のヒノキ球果ビーティング調査の結果、本所および筑後支所管内の1地点当たり平均寄生虫数は1.9頭と少なく、成虫の比率が高かった（94.7%）。

これらのことから、両管内ではカメムシ類はヒノキから離脱していると考えられる（±）。

ウ 9月5半旬調査の結果、富有での被害果の発生量は平年並であった（±）。

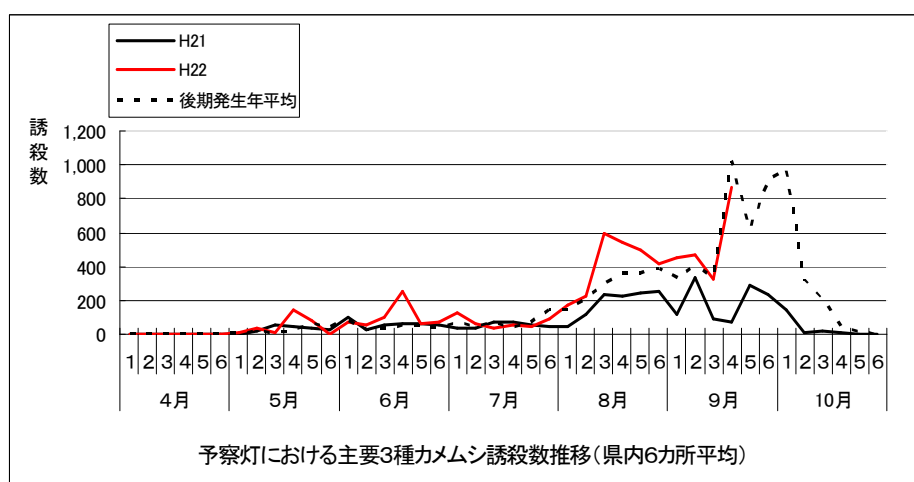
被害果率 0.6%（平年 2.2%、前年 0.2%）

発生ほ場率 46.2%（平年 49.6%、前年 14.3%）

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

カメムシ類は通常は夜行性であるが、夜温が低下する10月以降は、昼間も移動し果実を吸汁加害するので、昼間でも果樹園への飛来に注意する。



【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき ブコカカガラムシ	並	並	並	・発生が多い園地では薬剤防除を徹底する。

【野菜】

1 イチゴ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

発病株率 0%（平年 0.7%、前年 0.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（＋）。

ウ 7月に行ったエタノール浸漬法による炭疽病の潜在感染株調査では、過去4か年平均の中で最も高かった（＋）。

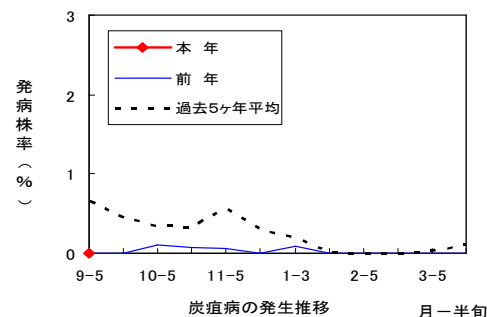
(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、ほ場外で処分する。

イ ビニル被覆時期までは感染する可能性があるため、定期的に防除を行う。

ウ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。

エ 無病親株の確保のため、秋期ランナーより採苗する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生株率 0.2%（平年 5.3%、前年 1.8%）

発生ほ場率 7.7%（平年 36.8%、前年 28.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

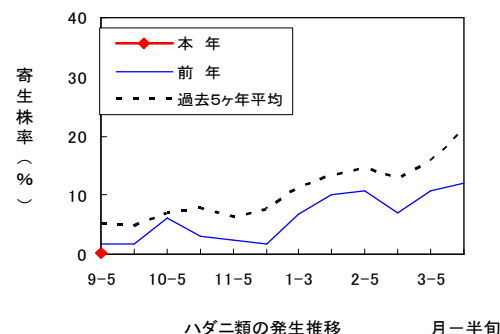
ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

イ 防除は、摘葉後に行うと効果的である。

ウ ハウス内と周辺ほ場の除草を徹底する。

また、摘葉した葉や除去した雑草はハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

エ ビニル被覆後に天敵を利用する場合は、天敵類への影響が大きい有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



3 ハスモンヨトウ（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、キャベツでの発生量は平年より多かった（+）。

寄生株率 15.3%（平年 5.6%、前年 0.4%）

イ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年並であった（±）。

寄生株率(本ぼ) 1.8%（平年 2.2%、前年 0.6%）

ウ フェロモントラップにおける9月1～5半旬の合計誘殺虫数はやや多かった（+）。

筑紫野市 2,175頭（平年2,490頭、前年 447頭）

柳川市 5,409頭（前年2,425頭）

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

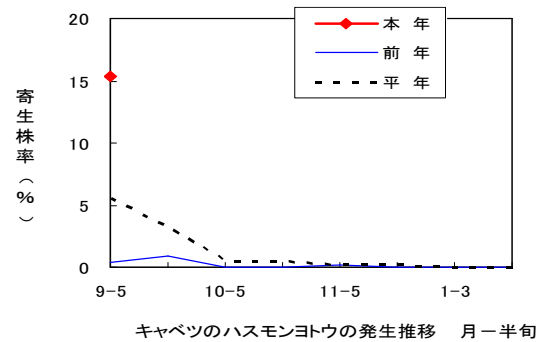
ア 孵化直後から3齢幼虫期までに薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 若齢幼虫は群生しており、かすり状の葉をみつけたら直ちに除去する。

エ 施設栽培では成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

オ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。



4 オオタバコガ（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、キャベツでの発生量は平年より多かった（+）。

寄生株率 19.7%（平年 2.3%、前年 4.8%）

イ 9月5半旬調査の結果、イチゴでの発生量は平年並であった（±）。

寄生株率(本ぼ) 0.9%（平年 0.8%、前年 0.5%）

ウ フェロモントラップ（県下6か所）における9月1～5半旬の合計誘殺虫数は平年よりやや少なかった（-）。

合計誘殺虫数 15.9頭（平年 59.4頭、前年 36.1頭）

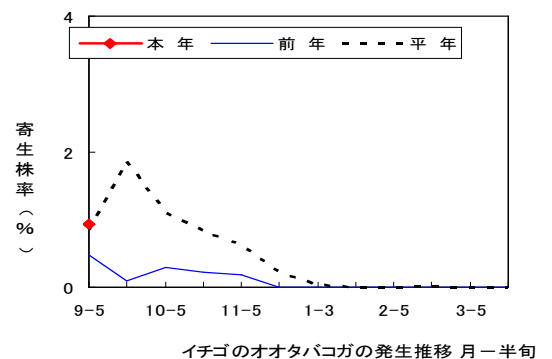
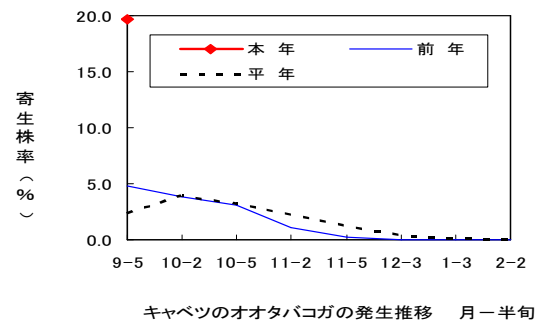
エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢以降の幼虫は未熟果や結球部位に食入するため、薬剤の効果著しく低下するので、早期発見に努め、孵化直後の幼虫を狙って防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ 散布ムラができないように、丁寧に薬剤を散布する。 ・ ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ
アザミウマ類	並	並	並	
イチゴ うどんこ病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆前後は発生が多くなるので、発生状況には十分注意し、防除を徹底する。
ナス うどんこ病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ 整枝、剪定を行い、通風を良くする。
野菜共通 ミナミキイロ アザミウマ	やや多	やや多	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ 防虫ネット (0.4mm目合い以下) を設置し、定期的な薬剤散布を実施する。 ・ 本虫はトマト黄化葉巻病やキュウリ退緑黄化病の媒介虫である。 防虫ネット (0.4mm目合い以下) を設置し、定期的な薬剤散布を実施する。
コナジラミ類	やや多	やや多	並	